

Title	初期三田演説会資料：「郵便報知新聞」関係記事
Sub Title	Materials assembled from the Yubin Hochi shimbun file on the Mita Enzetsukai (Mita oratorial society) through its early years
Author	松崎, 欣一 (Matsuzaki, Kinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1986
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.55, No.4 (1986. 5) ,p.81(351)- 106(376)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19860500-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初期三田演説会資料

—「郵便報知新聞」関係記事—

松崎欣一

近代社会における言論活動、とりわけ「人が其心に思ふ所を口に述べて公衆に告る」(「福沢全集緒言」という演説の重要性を認識した福沢諭吉とその周辺の人々が三田演説会を組織し発会式を行ったのは明治七年六月二十七日のことであった。翌八年五月一日には三田演説館も開館し三田演説会の討論会、演説会の活動はさかんなものになっていった。

三田演説会が明治演説史上、とくに民権運動昂揚期において果たした役割、また文明開化期における諸思想の啓蒙に果たした役割の大きさについてはすでによく論ぜられているところである。しかしながら、三田演説会そのものの具体像、例えばどのような人々が、何をどのような

論じたのか、それがどのように受けとめられたのかといったこと、またさらには三田演説会に関わった人々の慶応義塾外における演説活動の実態などについて、十分に明きらかにされているとは言いがたい。そこで本稿は初期の「郵便報知新聞」(明治八年〜十五年)より収集した三田演説会関係の記事をそのままに紹介し、三田演説会の具体像を明きらかにするための基礎資料を提供しようとするものである。いわゆる三田派とも言うべき人々の学外における演説活動については別稿に譲ることとする。なお「時事新報」創刊(明治十五年三月)以前であるこの時期の「郵便報知新聞」は、藤田茂吉、矢野文雄、犬養毅、尾崎行雄、箕浦勝人等を擁して、慶応義塾と福沢諭吉及びその周辺についての情報を比較的多く載せるものであったことは言うまでもない。

収集した資料は一般記事(「府下雑報」欄)のほか、「論説」や「社説」欄に紹介された演説記録、そして演説会の開催と演題及び演説者を予告する「告知」欄などからのものである。ここに紹介するにあたって、漢字及び仮名の字体については現行常用のものとし、振り仮名については一部を除いてこれを省いた。仮名の清濁は原文のままである。活字の潰れや印刷不鮮明なところなど判読不能個所については字数に応じて□□□として空欄とした。また原記事にはない句読点を筆者の責任において適宜施した。なお利用した「郵便報知新聞」は大洋写真工業社制作(昭和三十一年、読売新聞社所蔵)のマイクロフィルム(慶応義塾図書館所蔵)である。

次にいくつかの資料について若干のコメントを付しておきたい。「郵便報知新聞」紙上の三田演説会に関する記事の初出は三田演説館開館についてのものである(明治八年(1))。開館日の集会を「神武以来未曾有のもの」とし、また毎月第一土曜の演説会が公開されることを伝え、「誰れ〜も今度へ行たいものだ」と三田演説会への肩入れをした記事である。これを受けるかのように紙代値上げに関する三件の記事がある(明治八年(4)(5)(6))。値上げの理由として「社告」は三田演説会についての記

事を掲載することも含めて紙面の充実と拡張をすることを述べている。つづく値上げ賛成の投書の掲載はいささか出来すぎているがその内容は興味深い。

値上げのことは結局延期となったが演説会における演説の紹介は始められている。「論説」欄より四篇(明治八年(8))を採録した。猪飼、甲斐、小幡、四屋による演説である。演説時の文体がそのまま記録されたものではなく、演説のための覚書かあるいはそれに手を入れたものであろう。発会当初にまとめられた「三田演説会規則」(「慶応義塾百年史」上巻626〜632ページ)によれば演説会には「雑会」と「弁論会」の二形式があった。「雑会」とは自らの思う所を述べ、また自らの書き記した文章をもとに弁じ、あるいは読了した書物の一部を平易に講説するというものであり、「弁論会」とは予め課された論題についての賛否をグループに分かれあるいは各個に討論するものであった。報知紙上に発表された論説は「雑会」におけるものであったと思われる。

演説会の予告、開会日時の変更などについて、当初は「府下雑報」欄の一般記事としてみられるが、のちには明治十一年十二月十二日を初出(明治十一年(2))としてほぼ告知欄での通知となっている。とくに明治十二年及

び十三年については毎回の演説者と演題が予告されるようになる。現在、慶応義塾図書館に三田演説会の記録として「三田演説日記」が伝えられている。貴重な資料ではあるが内容的にはあまり詳しいものではない。発会当初においてはとくに会の運営方法をめぐる討議の記録が主要なものであり、以後は演説者名の記録となる。演説者の演題について毎回のそれがきちんと記録されるのは第一三六回演説会（明治十二年九月十三日）以降のことである。したがって「郵便報知新聞」の広告欄は、明治十二年前半各回の演題を知ることが出来る資料として「三田演説日記」の欠を補う重要なものとなる。また「告知」と「三田演説日記」の両資料を対照すると予告のみで実際には登壇しなかった者、演題の変更なども知ることが出来る。

明治十三年の「告知」（明治13年(1)）のうち、四月十日と二十三日の休会通知は同月五日に施行された集会条例への対応に手間取っていることを示すものである。六月二十六日の開会を通知する同月二十五日の「告知」で「但シ政談ニアラス」と特記し、また同日の「府下雑報」欄（明治十三年(2)）でもこのことにふれているのは条例への抵触ということに相当の注意を払っていること

を窺わせるものである。また少くとも演題にみる限り、この四月を境として以後のそれがしばらくは政談にかかわる要素を除くべく配慮している様子を読みとりうる。また「三田演説日記」によれば第一四八回演説会（三月二十七日）の記録のあとに「四月中ハ種々事情アリテ休会。又五月八日ハ第二土曜日ニ当レルヲ以テ定規ノ会日ナレトモ便宜ノ為メ翌日トス。」とあり、再開した五月九日の記録として「少々風模様ナレトモ天気ハ快晴ナリ。頗ル暖ヲ覚ユ。当日ハ集会条例之故歟、又ハ会日ノ異ナルニ由リシ歟聴客ハ極テ少々ナリキ」とあってこの間の状況をある程度推測することが出来る。

明治十四年三月三十一日の「府下雑報」欄（明治十四年(2)）に慶応義塾の教育の特色をのべる記事が載せられたのは四月二日のそれを初めとする「幼童演説会」の開催との関連によるものである。これらは明治十二年年頭の演説会開催を伝える記事（明治十二年(2)）とあわせて「予告」ではなく、実際に行われた演説会の雰囲気を探うことの出来る資料として貴重なものである。

福沢諭吉はほぼ毎回の演説会に出席している。「三田演説日記」によって病欠欠席などを確認出来るのがその事例はごくわずかである。その演説は主として学生を対

象としたものと、一般社会への発言を強く意識したものとに分けられるように思う。後者の例として明治十二年二月八日の演説会に関連する記事は興味深い（明治十二年(4)。二月六日の「告知」で「華族ヲ武ニ用ユル説」なる演説（実際の演説会では「華族を武辺に導くの説」となる。論説は「福沢全集」第十七卷所収。）が行われることの予告がなされたあと、二月十日の記事では演説会当日には武者小路以下の華族の出席のあったことが伝えられ、同月十七日にはこの論説が一篇の著述として陸海軍両卿へ進呈されたこと、さらに五月十四日にはこの一篇が岩倉具視宛にも贈られていたことが公表され、その書面をもってこの日の社説にかえられたという経過をたどることが出来る。さらに「福沢全集」第十七卷所載の福沢書翰（同巻283、290、325ページ）によって、岩倉他への福沢の論説の惠与とは書翰のかたちで行われ二月七日には発信されていたこと、岩倉からは折返しこれを印刷に付する考えが示され福沢は写本はよしとするも反対をしていること、七月二十日には茨城県の野手一郎よりのこの論説に関する質問に答える福沢の返信のあることなどが判明する。いずれにせよ、福沢の提言が演説会での弁論を軸として様々の手段によって広められ何等かの反

響を呼び起していることが窺えるものである。

明治十二年十月十四日、十五両日にわたった社説も九月二十七日の三田演説会における福沢の演説記録である（明治十二年(5)。そしてこの記録もほぼそのまま明治十三年八月出版の「民間経済録二編」第一章の後半を構成するようになっていいる。

なお本資料紹介に採録した記事は三田演説会に直接的に関係するものに限っている。この時期の「郵便報知新聞」紙上には慶応義塾関係者による論説が相当数みられる。三田演説会に関する考察はこれらの記事についての検討も必要となるであろうことを付記しておきたい。

二

郵便報知新聞三田演説会関係記事

（明治八年～明治十五年）

明治八年

(1) 演説館開館（「府下雑報」欄）

福沢氏我国に於て演説の方法なきを憂ひ夙とに之をおこさん事を企てしが、此度大ひに私財を擲ち一字の厦屋を造営し三田演説会館なるものを興せり。建築の美ハ勿

論其結構簡蔽にして且清潔実に目覚しきありさまなり。

五月一日ハ開館にて社員及ひ外より来会する者すべて四百人計り、午後八時より社員の面々各祝詞を誦し演説の利益を講し十一時に至て終れり。世に集会のなきにあらねど此会の如きハ神武以来未曾有のものにて近來の一大快事と思へたりと。猶ほ毎月第一の土曜日ハ此大会を催し勝手に聴聞を許すよしなれハ誰れノも今度ハ行きたいものだ。但し其祝文等ハ別に出版するよしなり。
(五月四日)

(2) 演説会公開日変更 (「府下雜報欄」)

三田演述会ハ是迄月々第一の土曜日のみ勝手に聴聞を許す事なりしが、以來ハ第一と第三と兩次の土曜日ハ外来聴聞を許し、第二第四の土曜日ハ社中の事務もあれハ外来を許さずと改定せりと言ふ。(六月二十四日)

(3) 演説会予告 (「府下雜報」欄)

本日ハ月初の土曜日にして三田演述会ハ外来聴衆を容す日なれハ、定めて奇説珍論つゞきいて疊出して一段を了する毎に拍掌てをたくの聲其堂に溢るゝならん。(七月三日)

(4) 社告 (演説記録の収載による値上げ通知)

本社稟白。此迄の紙の幅にてハ方々の投書も思ふやうに載せられず投書家に氣の毒なり。雜報も十分に記すことが出事ず、又近日都下の方々に集會あり其説も記したし。殊に三田の演説会も追々盛になり此新聞紙に記すことを謀れり。旁以て紙の幅を広くせねハならぬに依て、來る七月二日より愈改拵めて左に記したる通りの代価に致し候間、不相替御用を願ひ候。就てハ御見合せの方ハ御遠慮なく速に御申聞被下度。左も無之候(ママ)とは是迄の通り日々遁送致し申候。

一枚 三錢。一ヶ月前金 六拾八錢。半ヶ年間同

三円拾五錢。一ヶ年間同 五円廿五錢。府外及ひ遠

国の分ハ右外の郵便税申受候事。

三田演述会ハ福沢論吉先生を始め室に入り堂(ママ)に升る諸彦の新説高論を漏さず日々刊布すれハ、標するに論説の字を以てし社説ハ別ニ社説と題して之と混せさらしむ。

(六月八日。六月十四日に同文の社告あり、次行に「明六雜誌三十八号。三田演説筆記初号本日發兌。」の通知がある。)

(5) 社告賛成の投書

投書。今朝あなたの処の新聞に、此迄の紙幅では投書も思ふやうに載せられず、雑報も十分に記す事が出来ず、又方々の集合説(会カ)も記したし、殊更三田の演説会を記載なさるに付、来月二日より直段を上るから見合せる者は申越せとの事でありましたが、先日一寸読売新聞にてあなたの処の新聞に彼の福沢大先生が高論とか言ことを御記しなさると申事を見ましてより、けふか明日と待て居りました処、今日稟白と云ので弥本とうの事と実に嬉しう御座り升。明日からでもかまいません。どうぞ一日も早く御出し成すつて下たさいまし。若し又直段が高く成るに付て断る人がありましたらどんなやつだか新聞の隅へ名前を出て見せて下たさい。そんなやつにハ以後新聞を見せてやらぬが宜ふ御座ります。私も苦しがりで月々三十六銭も楽しく出る身分でハ御座りませんが、こんだ御改めなさるに就てハ尚更止める事ハ出来ません。今より大好な烟草も止めにしまでも前金ハ滞なく差出します心得で御座ります。昨年中煙草ハむたなもの故よして新聞を見ると云投書がありましたのを覚えて居り升。序てにもう一ツ申す。此度御出しなさる新説高論も成る丈け六ヶ敷くない文字を御遣ひ成されて下さいまし。私共にも能く解せる様に御願ひ申す。六月八日。銀座

辺の貧生。原田安夜吏。(六月十日)

(6) 社告(紙幅変更延期)

稟白。来月二日より新聞の紙幅を弘むる事を是是度々告知せしが、差支る事あるに依り先当分是迄の通り据置候間此段改て報告致候。(六月三十日)

(7) 演説会予告二件(「府下雑報」欄)

三田の演説会ハ暑中間休みでありましたが、愈々来る四日より始まります。何れ追々新聞に出しましよふ。(九月二日)

今十八日ハ第三番目の土曜日なれば三田演説会の当日にて、午後七時半より始まり衆人勝手次第に聴聞を許す計りでなく誰にても議論のある人ハ演説せしむといふ。(九月十八日)

(8) 演説会演説記録四篇

五月第二土曜日演説

文学技術の変遷を論ず

猪飼麻二郎

文学技術ハ人民の智力の顕像なり。故に時勢の変遷に随ひ全く其趣を異にす。往昔希臘羅馬の盛世に当てハ詩

学、画学、建築学、彫像術、音楽及び議論講説等の隆盛なる能く後世の及ぶ所にあらざるなり。即ち欧州「フラインアート」技術の春にして其花満開の時節なり。然れ共「セイアンス」技術科学及び「ユースフルアート」実用の如きに至てハ現今を以て遙に往昔の希臘羅馬に超越せりとす。蓋し希臘羅馬の盛世に当てハ人々身体の勤勞を賤しむの風ありて製作百工の芸術ハ悉皆奴隸の為す所となれり。故に士君子学者の輩ハ徒に文雅風流に従事し一も世の經濟に眼を注て以て其精神を百工製作商売の事に委る者あることなし。而して奴隸なる者ハ其勤勞及び勤勞の結果(マヤ)悉く主人の所有なれハ曾て勤勞に勉勵するの刺衝なし。此を以て今日に於て欧州の学者最も注意する所の經濟学の如きハ当世毫も知らざりしなり。而して現今大に欧州開明の進歩を補助する所の省勞「フラインアート」の□□□□せし所以な□□□□頽敗の時に當て彼の爛漫たる満開の「フラインアート」花も殆と清散し今日に至りて尚之を回復することを得ず。然り而して欧州現今の文学技術なる者ハ羅馬頽敗以降新たに萌芽せし者なり。当今此萌芽漸く其花を開くに至りて其趣全く往昔と異なり、即ち往昔の文学技術なる者ハ風流にして現今の文学技術なる者ハ実用なり。蓋し其然所以の者ハ往昔一種の

源ありて(ウラ)榮々たる雋才の士其才力を文雅風流に用ひて之を実学に用ひざりし故なり。

亜細亞州中支那の如きハ太古より周秦漢唐宋明等の歴史其文華の隆盛なる殆と極度に達せりと云ふ可し。然れ共「サイアンス」及び「ユースフルアート」に至て其進歩の度甚た卑くして、蓋し希臘羅馬と其原因を同ふするに似たり。他に種々の源因ある可しと雖も、茲に之を論ずるを要せず。我國亦如此し。其文華風流の盛なる殆と支那と相競ふの勢ありて、太古以降和歌連歌より以て小説伝奇の類に至り能く其巧妙を極めたり。加之支那学の如きも名彦鴻儒輩出して或ハ文を草し或ハ詩を賦し、殆亦其深奥に達せりと謂つ可し。然り而して戊辰の革命前後此類の文華頓に衰廢の状を現出せり。此に於て世人或ハ此景況を察し大に之を悲歎する者ありと雖も此輩ハ徒に衰廢の二字を恐れて毫も其理を顧ざるの輩なり。夫れ現今我國文華の衰廢せるハ我国人心の変動に因り、政事及び百般の事物と共に文学の変遷せし者なり。猶欧州にて羅馬敗墜以降新に文学の萌芽せし如く、我國今欧州の実学を取て之を移植し將に其新芽を萌さふんとするの時なり。故に現今ハ我國文学技術の風流より転して実用に変遷するの時にして我輩大に之を欣喜せざるを得ざる也。何となれハ此「クリシス」変り目ハ文

明進歩中必ず一度びハ経過せざるを得されハなり。然り而して茲に亦一層我輩の欣喜を加ふる者あり。即ち欧州の実学たるや羅馬敗墜以降千有余年の星霜を経て漸く之を鍊出し以て今日の隆盛を致せしなり。然れ共我国の如ハ既に存在する者を取て之を移植するを要するのミ。故に欧州に比すれハ其勞の少くして其進歩の迅速なること我輩の断して知る所なり。須く現今を称して日本文学の新紀元と謂つ可し。豈之を悲歎するの理あらん乎。(七月七日、「論説」)

五月第四土曜日

疑心ハ文明の基礎

甲斐 織衛

凡そ国の文明に進むハ各人事物に疑を容れ吟味穿鑿を遂げ真理を發明するにあり。故に真理を發明すること益多き時ハ其国の文明ハ從て進むものなり。今夫之に反して各人事物に疑を容れず、吟味穿鑿を遂げず理非の弁別をもなさずして漫に之を信する時ハ其国人民の精神発達することなし。精神発達せざれハ国中の事物永世変遷改革することなく人心次第に懶惰に陥り一般の弊風を醸し文明の退歩得て見るべきなり。

今其一例を挙て云はんに、我国封建世祿の世に当て士

農工商の分格頗る嚴密にして、大名と稱するもの智恵の有無に係ハらず唯其家に生れたと云ふ廻り合せの運命にて衆民の上に位し、下を視ること犬馬の如く其為る所を問ヘバ殆んど兎戯に異ならず。不正不公ハ日々職□の。其臣族なるものも亦非常の権柄を握り他三民の如きハ身体も持物も其所有にあらざるものゝ如し。実に同類の人間とハ思ハれず。一層下等の人間の如し。就中百姓ハ生涯苦しき耕作に従事し汗水を流して作り出した其米ハ過半年貢に取上られ家族ハ朝夕衣食に窮し頭の上の日とてハなく実に憐むべき有様なりき。

夫に引替へ武家なるもの、他三民を保護したとか守護するとか言ふ申分にて百姓の膏血を喰潰し、驕奢遊惰にのミ沈溺しそれ相應の職務を勤めざるに至れ共、他三民尚依然として旧に異ならず。星に出て星に入り風雨寒暑の厭ひなく勤勞至らざる所なしと雖も、生涯貧苦に其身を終り彼の道楽旦那に仕送りたるハ実に情なきことならずや。

抑も人ハ勤勞すれハ善報を得、安逸なれハ惡報を得るハ自然の道理なるに、彼の封建世祿の仕組を聊か不審に思ひ疑を容れたるもの一人もなし。沉んや之を改革せん杯とハ二百年來夢にたも見ざりしことならん。畢竟專政

の下に精神を束縛され数百年の星霜を経て終に習慣となり御上とさへ言へば何んでも蚊でも従ふべきものと思ひ込み、其分限を越すして一生懸命に過なきを祈り圧制も束縛も見て以て常事とし上として圧制をなさず、下として圧制を厭ふ時ハ反つて非常の事に思ひ、変てこな考を起すに至れり。其根性ハ骨がらみにからみ付て動もすれハ今も毒を吹き出すことあり。

右の如く数百年來精神氣力を束縛せられしより頭を働かせて新しき事を考へ出すの氣力も遂に消滅して、唯先祖代々の足跡を踏ミ先祖代々の摸型より溢るるを厭ひ、只管旧物を墓守するか習慣となり世の変化を越すへき源を除去したり。

然るに王政維新以前より稍天下に不平を唱ふるの徒輩出して世の弊風を嘆き、恰も静海稍風波を起したるの姿をなして遂に明治の革命をなすに至れり。斯くして世事の形勢更に一面目を改め四民同等となり、農工商も智徳あれば高位高官に登るべく、武家ハ昔日の武家にあらず。婦農離商の免許あり。大名ハ職を県官に譲り、士ハ職を鎮台に渡し懶惰無為に日を渡らば乞食にも下落すへき時節となりしハ抑も何等の物ありて此改革変化を引き出したる機関となりしや。想ふに人民の間に生したる疑

の一字より此大運動を引起せしならん。此変化の起りしハ実に不思議に思はるゝ共、決して不思議にあらず。數百年間此改革の起らざるこそ却て不思議と言へきなり。

右の如く四民同等を免せしハ畢竟今迄四民に分格を設け人心を束縛せしハ自然の理に反したる事柄ならんと思ひ初めたる疑心よりして吟味穿鑿を遂けたるなり。嗚呼我國文明の曙となりし彼大變革も其源を探る時ハ一の疑心より生したるならずや。故に人間たるものハ他人を害するにあらざるよりハ心を自由に遣ひ事々物々疑を容れて吟味穿鑿を遂くへきなり。

右ハ我國に於て疑より発して吟味穿鑿を遂げ其運動にて起りたる変化なり。西洋各国の文明に進ミ今の繁栄を極めしも元來皆此吟味穿鑿を遂げ事物の真理を發明せしに依るなり。故に疑ハ容れざるべからず。穿鑿ハなさざるべからず。政府の挙動民間の事情学文技芸他の少事と雖も見捨ることなく、やたらに信することなく深く吟味穿鑿を遂げて真理を發明すべし。

上文の趣意を概して言へハ国の文明ハ真理を發明するにあり。真理を發明するハ吟味穿鑿を極むるにあり。吟味穿鑿ハ疑心より起る。故に疑心ハ文明の基礎なること明かなり。斯の如く事物ハ何でも疑を容ざるべからずと

云時ハ世人或ハ誤解するものあらん。上に云ふ所の疑心ハ決して徒に事物を疑へと云にあらす。徒に事物を疑ふ時ハ動もすると猜忌と変し怨望となることあり。此猜忌怨望の如きハ最も悪むべき害物にて文明の妨碍なれば決して免すべからず。彼の文明を起すへき疑心ハ吟味穿鑿なるものゝ常に相伴て離れざるを云ふ。疑心より吟味を起し吟味又疑を生し、互に助けて互に補ひ以て世の文明を進むるなり。故に徒に疑心のみなる時ハ怨望となり猜忌と変し文明に益なきのみならず却て之を退そかしむるに至る。実に恐るべきことなり。世人よく此分界を誤解するなかれ。(七月九日、「論説」)

七月三日演述

小幡篤次郎

ミル氏スリイ、イセイイス、オン、レリジョンより訳出す。

造化ハ至善にして全能のものと云ふと雖も平心にして之を考ふれハ決して然らず。人と人との交際なれハ絞罪となり禁獄となる所の悪逆も造化ハ日として之を行ハさるハな□。譬へハ殺害ハ人間仲間の掟にてハ最大悪事と定るものなるに造化ハ誰彼の差別なく一度ハ屹度殺さゝることなし。況も大概ハ人間中に殆ど例なき慘酷を極め

永日之を苦しめし後ちにこれが命を絶つにあらすや。今大負に造化に轟肩して殊更に定命を縮るものに非ざれば殺の一字を下し難きとするも造化ハ百中一二の他ハ或ハ陽に或ハ陰に百般の方便を用ひ寿命を縮るの酷なるハ人類中の極悪人と雖も三舎を譲る程なり。造化ハ大輪を以て隣隣するが如く人を圧死し野獸に投して之を食ハしめ火以て之を焼き石以て之を埋め之を餓死し之を凍死し又其蒸出の毒気を以て人を緩急の間に毒殺す。造化ハ実に桀・紂も及ハざる残忍非道の無尽蔵なり。加之造化ハ人を殺すに善悪邪正の区別なく人類中の至貴至善の者に向て鳴鏑を射貫するハ至陋至悪の者と少しも撰む所なし。又濟世益民の業を興すをも顧みず動もすれハ此業を興すが為めに死を以て之に酬ふことあり。其光景を見る時ハ造化ハ人の善を悪て之を罰するものと思ハざるを得ず。又造化ハ一世の安危其人の存亡に關するが如き貴重的人物を刈倒すの易きハ猶ほ世を害するの人にして其人の死亡ハ一世の慶幸となる可き者と愛惜毫厘の差なきが如し。之を要するに造化の人命を処するの法なきこと斯の如く夫れ甚し。

又造化ハ殺意なき所にも殊更に人を苦ましむることあり。人の生るゝや急にせずとも一度ハ死ぬる寿命なるに、

態と人を転して或ハ数時或ハ数日の間拷問の台に上げ竹節を挫くの苦痛を□けざれば分婉せざるの法□なし。

之が為めにハ啻苦痛のみならず□命を亡ふ者あり。又生命に次て貴重なる者ハ財産なり。然るに造化ハ人の財産を掠奪すること実に容易なり。颶風を下して一秋の収納を空し蝗虫水災を降して一地方に惨毒を流し根草芋大根の類の

舎密変化を起して数百万の生□流離頰沛に哀ましめ海洋の波濤を以て人の宝貨を掠奪するハ海賊の所為に似て貧富顧慮する所なし。加之之を傷け之を殺すの残悪を以てす。結局造化ハ財を掠め命を害するに憚なきハ悪人と聊

か異なる所なし。砥山の火は砲撃の如く瘟疫劇痢ハボルジャ羅馬法王の子にして大に人を毒殺せし者の毒酒より甚し。人或ハ云ふ。始めあり終りあるハ造化の道と。之に反して造化の道ハ法なく

則なく人の乱猥として賤む所ハ正に造化の居る所なり。所謂無君無父の乱も仏国恐怖の世も不正不義流離頰沛の甚しきハ大風瘟疫の禍に及ふこと能ハす。

然るに人或ハ言はん。上文の災も全く造化人をして聡明良善に向ハしめんが為なりと。余之に答へて云はん。其善と不善と、知と不知とハ全く世の所謂造化を学ぶの説に関する所にあらず。何となれば造化ハ陽に何如なる悪事を行ふも陰に善良の目的を崇めんとするの説あるも

人として造化を学て善に進むの説ある可らず。造化ハ決

して人の学ふ可き師範ならず。若し之を師となす時ハ造化人を殺せハ人亦之を殺す可き歟、造化人を苦むれば人亦之を苦しめ造化人を零落せしむれば人亦之を零落せしむ可き歟、造化の為る所ハ心に之を思ふハ悪し之を行ふハ善しと云ふ歟、矛盾も亦甚し。造化之を為すと云ふを

以て一事にても之に倣ふ可きの理あらハ何を以て十も百も之に倣ふ可らざる。若又悉皆之に倣ふハ善らすと云ハ、何を以て一事ハ善とするの理ある。既に有形の事に付く造化の所為斯の如く極めて悪しき時ハ造化の道に従て人の行を導くの説ハ決して法教の取らざる所、蓋し又道徳の許さるる所なり。

造化の道に十全の美を帰する者ハ詩人或ハ信心者の過称より始るものなり。凡そ人として造化の害力を概見し尚之を良善の所為と信するものある可らず。唯造化の害力ハ人をして立て之と争ふの心を生せしむるの他ハ其功あることなし。若し斯の如き災害ハ皆大慈悲の造化人を善に進めんが為めに設る所のものとせハ人として大ハ悪気の沼池を浚へるより小ハ齒痛を治め傘笠を開くに至るまで造化の害力を防ぐの事ハ悉皆天を憚らざるの所業と言ハざる可らず。人々自から心に問ハ、誰か口造化

を学ふと唱ふるも此害力を以て天の至恵と思ふものあらんや。之に反して開化国人の最も誇称する所ハ何れにか在る造化の害力を捕縛して能く之を鎮圧するを云ふに非ずや。然るも世人の説に従へハ此害力ハ人の薬石なりと云ふに非ずや。若し此説をして真ならしめハ一世毎に前一世より巧みに薬石を避るが為めに今世の如きハ既に妖魔の巢窟となりたる可し。何となれば人の能く克ちし所のものハ昔年の薬石なればなり。然るも斯る謬誤を誠真の理と信するものあらば人將之を聖と言はん歟、將た之を狂と言はん歟、必ずや之を狂と言はん。(八月二日、

「論説」)

九月四日第一土曜於演説

四屋純三郎

人ハ互ニ交ヲ結フニヨリテ以テ人タルノ道ヲ尽スベク、以テ始メテ其生ヲ全フスルコトヲ得ベシ。サレバ互ニ相助ケ相憐ムハ其本来ノ性ノ要スル所タル明ナレバ、若シモ此情□クコノ行ニ乏シキ者アラバ即チ之ヲ人ニ非ストイフモ可ナリ。且ツソレ人ハ終身タゞ食ヲ作りテ之ヲ喰ヒ衣ヲ織リテ之ヲ着ルノミニシテソノ外更ニナスコトナクバソノ不自由イカバカリナルベキヤ。其楽ミ何程浅少ナルベキヤソノアリサマ如何ニ憐レナルベキヤ。蓋

シ人類全躰ノ摸様ハ一群ノ蟻螂ト遂ニ異ル所ナキニ至ラントス。カルガユエニ人類相憐ムノ情ハ人ノ快樂ノ基本ニシテ世ヲ憂ルノ行ハ其最モ貴ムベキ美事ナリ。古今万国皆以テ然リト為ス。故ニ支那或ハ我カ日本ニ在リテモ古来有志ノ人々ハ既ニ一身ノ独立活計ヲ得ルニ至ルモナホ飽クコトヲ知ラズ。自己一身ノ為メニスルニアラズシテ更ニ期スル所アリ。専ラ智徳ノ研磨ニ従事シ動モスレバ世人ノ嘲笑ヲ招クニ至レル者尠カラズ。嗚呼其志実ニ壮ナラズヤ。其操亦堅ナラズヤ。苟モ真正人タランモノハ宜ク斯ノ如クナルベキモノナリ。

右ノ人々其志操ノ美ナルハ我々感賞ノ外更ニ為スベキアルコトナシトイヘトモ、其志ヲ実事ニ施スノ地位ノ如キハ往々其見ヲ誤レル者多キガ如シ。然リトイヘトモ其謬誤ニ陥ルハ決シテ罪ヲ各人知見ノ陋劣ナルニ歸スベカラズ。抑別ニソノ由縁アリ。ソレ東方亞細亞ノ風俗タルヤ独リ君主ヲ以テ天下ノ公事ヲ担当スル者ト做シ百官有司之カ補佐タリ。而シテ之ニ臣服スル所ノ凡百ノ庶民ハタゞ命コレ従ヒ百姓ハ年貢米ヲ作り商人ハ産物ヲ売買シ工匠ハ家屋器具ヲ造リ、代々自家相伝ノ業ヲ営ムノミニテ少シクモ他事ヲ願ルヲ要セズ。タゞニ要セサルノミナラズ。世上ノ事ハ庶民敢テ之ヲ議スルコトヲモエザルノ

有様ナリ。斯ノ如ク天下ノ公事ヲ知ルモノハ国君ニ非ザレバ即チ補佐ノ官人ニ限ルノ風俗ナルカユエニ、苟モ世ヲ憂フルノ志アル者ハ草莽間ニ在リテハ遂ニ志ヲ伸フルコトヲ得サルヲ以テ必スシモ政府ノ列ニ加ハラサルヲ得サルノ勢ナリ。而シテコノ風俗長ク伝ハリテ深ク人ノ心ニ染ミコミシユエ、今日開明ノ世ニ至リテモ有志ノ士或ハ其宿志ヲノベテ榮名ヲアクルハ必スシモ政府ノ軒下ニ宿ラサルヲ得サルモノト心得ルナリ。

然リトイヘトモ政府ヲ除クノ外天下豈ニ世ヲ憂フルノ地位ナカラシヤ。且ツ政府ハ一国ノ公務ヲ扱フノ場所タリトイヘトモ其職掌ノ如キハ固ヨリ制限アリ。決シテ一切ノ公事ヲ以尽ク之ニ委スベキニアラサルナリ。其関スベキハタゞ国民保護ノタメニ止ムベカラサル条件ノミ。其余ハ天下ノ公事ト雖モ、ナルベク政府ノ之ニ関与セザランコトヲ欲ス。其故ハ政府ニテ取扱フ事務ハ之ヲ私ニ行フ事業ニ比スレバ常ニ其拙劣ナルヲ明ナレハナリ。カノ百般ノ學術ヲ研究シ之ヲシテ益精明ナラシメ、或ハ一身ノ智徳ヲ養成シテ世人ニ先タチテ事物ノ方向ヲ示スモノ、如キハ則チ世ヲ益スルノ人ニアラサルカ、工業ヲ起シ製造ヲ盛ニシ以テ国用ヲ殖スハ公利得ル所以ノ企ニアラザルヤ。或ハ農業ニ従事シ且ツ其術ノ進歩ヲ謀リ、或

ハ運輸貿易ヲ務メテ内外各地ノ便利ヲ求ムルハ之ヲ全ク私利ヲ謀ルノ事トイフヘキカ。医ヲ業トシテ諸人ノ病ヲ癒シ人命ノ保護ヲ職トスルモノハ則チ世ノ衆人ヲ恵ムノ事業ニ非サルヤ。此等悉皆世ノ益ヲ謀ル所以ノ事業ナリ。(其外ニモ例ヲアグルハ甚ダ容易クシテ数モ亦沢山ナレト無用ナレバ之ヲ略ス)概シテイヘバ天下ノ事、国民一般ニ及フ所ノ法ヲ定メテ之ヲ行ハレシムルノ一事ノ外ハ即チ尽ク政府外ノ事ニシテ、而シテ殆ト皆公益ヲ起スノ業ナリ。故ニ我レハ世ヲ憂フルノ地位ノ少ナキヲ患ヒス^(マ)シテ唯其人ノ乏シキヲ恨ムノミ。

右ノ如ク世ヲ憂フルノ地位ハ政府局内ニ非スシテ而シテ天下ニ存スルモノ甚ダ夥シ。然ルモノ之ヲ認メエズシテ専ラ政府ヲ以テ憂世ノ地位ト為スモノハタゞ旧染ノ迷ヒニ誘カレテ然ルモノナリ。決シテ事實ニ於テ然ルモノニアラサルナリ。旧事ヲ以テ直ニ今日ノ事ニ比較シ先人ノ考説ヲ以テ當時ノ事物ヲ見渡スカ故ニ、私ノ營業ハ世益薄クシテ賤シク政府ノ事ハ益大ニシテ且ツ貴シトノ惑念ヲ生スルナリ。イマ人憂世ノ切ナル志ヲ以テ事ニ従ハ、何等ノ職ニ就クモ其世ヲ益スルヤ必ス政府ノ事ニ優ルトモ決シテ劣ラサルナリ。然リトイヘトモ人モシ此貴ムベキ志ナクバ、タトヒ政府ノ地位ニ在ルモ其行フ所世ノ

害ヲ為スコトアルモ決シテ益ヲナス能ハズ。又斯ノ如キ人ニシテ農商ノ業ニ就カシメバ、即チタ、政府ノ命是レ従フ所ノ憐ムヘキ愚民タルベキノミ。世ニ於テ何ゾ殊益アランヤ。嗚呼大切ナルモノハ精神ナリ。欠クベカラサルモノハ憂世ノ志ナリ。独リ此志ノ在ル所即チ公益ノ起ル所榮譽ノ発スル所ナリ。有志ノ士君子慎ミテ其方向ヲ誤ル勿レ。(十月二十三日、「論説」)

明治九年

(1) 演説会休会通知(「府下雜報」欄)

今十九日ハ三田演説会がある筈の処、元紀州の水野氏より和漢の書冊数千巻を借り受け演説館に取り広げ右の書物を整頓する為め場所の差支があるので休みになり、来三月四日より例の通り第一、第三の土曜日にハ会を催され升。(二月十九日)

(2) 演説会公開日時変更通知(「府下雜報」欄)

三田の演説会ハこれまで夜分にて遠方の人には不都合なりしが、当四月より毎月第二、第四土曜日の午後二時より演説なし勝手に傍聴を許すとのこと。定て相替らず繁昌しましよふ。(三月二十日)

明治十年

(1) 演説会予告五件(「府下雜報」欄)

三田慶応義塾の演説会ハ久しく休会せしが本日ハ初会を催さるゝに付き例の午後二時より開場に相成ります。(二月二十七日)

三田慶応義塾の演説会ハ例の通明十日午後二時始る由。(二月九日)

三田慶応義塾の演説会ハ是迄夏休みにて休会なりしが今日午後二時より例の如く会場を開かるゝと。(九月二十二日)

力士久敷場ばに上らされハ力瘤満ちて腕腫れ痛み、勇卒常に戦に臨まされハ脊血凝りて塊かたまりを為す。此時に方りて場に登り戦に臨めハ力士ハ必らず名譽の勝を取り、勇卒ハ必らず無類の功を収む。三田慶応義塾の演述会も是迄長くの夏休みにて諸学士も力瘤せくのちや脊血の塊か張り切て居ましたるふか。漸く今廿七日午後一時より堂を開き席に就く事になり、福沢先生始め諸学士か十分に弁を振られますから、常より一段面白く聞かれると聴聞人ハ朝から詰込まました。(十月二十七日)

本日午後一時より三田慶応義塾演説舎に於て演説あり。(十一月十日)

明治十一年

(1) 演説会予告七件〔「府下雜報」欄〕

本月十二日ハ三田の演舌発会にて午後一時より開館、且つ同日ハ社中の試文を開封し褒賞附与の事を執行ハるゝよし。(一月十一日)

今廿六日ハ午後一時より三田慶応義塾にて例の通り演説会があります。(一月二十六日)

本日ハ三田慶応義塾にて例の通り午後二時ハ演説会が有り升。(七月十三日)

今廿七日ハ三田慶応義塾の演説会が午後二時より初ります。但し暑中なれば来月中ハ休会。(七月二十七日)

本日午後二時より例の通り三田慶応義塾にて演説会が有ります。(九月二十八日)

三田慶応義塾の例月演説会ハ今廿六日午後二時より始めらるゝよし。(十月二十六日)

明九日三田の慶応義塾にて例の通り演説会があります。(十一月八日)

(2) 演説会広告〔「告知」欄〕

演説会。来ル十四日午後二時ヨリ開場。福沢諭吉・宗教ノ説。小幡篤次郎・保護税論。猪飼麻次郎・貨幣ノ説。

加藤政之助・外交ノ説。四屋純三郎・兵制ノ説。古渡資秀・警察ノ説。吉良亨・勢ノ説。本山彦一・漕運変遷論。三田演説会幹事。(十二月十二日)

明治十二年

(1) 演説会発会広告〔「告知」欄〕

演説発会。来る十一日午後二時より。外交論・福沢諭吉。競争論・須田辰次郎。通貨論・猪飼麻次郎。憲法論・加藤政之助。新年の感・四屋純三郎。改宗の利害・門野幾之進。琉球藩処分・古渡資秀。関東論・真中直道。演説発会前午後一時より二時迄例年之通試文褒賞授与式を執行。三田演説会。幹事。(一月十日)

(2) 演説発会・試文褒賞〔「府下雜報」欄〕

三田の慶応義塾にて毎年々末に試文題を塾中に掲示し、生徒は其題に従て稿を草し一月五日迄に匿名にて出したるを、判者則ち福沢小幡の両先生が其優劣を列し、演説発会(一昨十一日)の席上にて優劣に賞を与へらるゝ定なるが、当年其賞を得たるハ大人生にて(甲)中村英吉、(乙)齋藤恒次郎、(丙)高橋周治、中年生にて(甲)栗原半八郎、(乙)岩谷彦三郎、(丙)磯部弥一郎、

童子生にて(甲)福沢捨次郎、(乙)人名不詳、(丙)原田俊吉の九人なるが、別けて今度ハ童子生の進歩が現ハれ三等賞の外尚ほ見るべき文稿六篇程もありしとか。本年の演説発会は例よりも聴衆多く満場立錐の地なき中を、妙齡の生徒が名を呼ハるゝに従ひ進み出て賞を受けたるハ頗る面目を施すといふへし。又該塾にては常に三百余名の生徒を分けて五組となし毎月二回の演説を開きしが、此日各組より公選に中りて中年予備科にて高橋周治(教育論)、卒業生にて真中直道(関東論)、童子生にて岩橋三郎(勤励ヲ論ス)及ヒ井上貫一(競争ノ精神)を演説されしが其論理と言ひ音調と言ひ聴者をして一驚を喰はしめたり。(一月十三日)

(3) 演説会例会中止広告(「告知」欄)

来る廿五日ハ邸内演説館に於て演説の例日に候へ共差支有之相止め申候。尚此旨広告致す。三田。慶応義塾。

演説会幹事。(一月二十二日)

(4) 二月八日演説会関係四件

演説会。来ル八日午後一時発会。華族ヲ武ニ用ユル説・福沢諭吉。通貨ノ説・猪飼麻次郎。流行ニ走ルノ弊・

加藤政之助。条約改正ノ好報果シテ如何・古渡資秀。世渡ノ良方便・河野捨蔵。三田演説会幹事。(二月六日「告知」欄)

去る八日(第二土曜日)にハ例の通り三田慶応義塾にて演説会あり、聴衆ハ何時も変らず凡そ三百余名来集し、其中にハ華族武者小路、万里小路、松平信正、松平忠慶君等も見へられたり。(二月十日「府下雜報」欄)

福沢諭吉君ハ華族を武辺に導くの説と題する一篇を著述して頃日陸海兩卿へ呈せられし由。(二月十七日「府下雜報」欄)

左ノ一篇ハ福沢先生ガ右府岩倉公ニ呈シタル書面ナリ。今之ヲ得タレハ記シテ以テ本日ノ社説ニ換フ。華族ヲ武辺に導クノ説。(以下本文省略、「福沢全集」第十七卷所収)(五月十四日「社説」)

(5) 福沢諭吉演説記録(十月十四日、十五日「社説」分載)

明治十二年九月二十七日三田演説

富家ノ子弟教育之事

福沢 諭吉

本日ハ富家ノ子弟教育ノ事ヲ演ヘントスル約束ナレトモ、之ヲ演ル前ニ其誘導ノ物語トシテ少シク云フ所アラントス。諸君コレガ為ニ十分時計リノ時ヲ許セヨ。(以下

本文省略。福沢「民間経済録二編」第一章の後半全文がこの演説によっている。「福沢全集」第四卷所収。十四日に続く十五日社説欄本文のあとに次の一節が付け加わえられている。

記者曰ク從來ノ經驗ニ拠リテ之ヲ徴スルニ、教育ハ寧ロ貧人ノ専ラニスル所ナルカ如キ事情アリキ。学者ト呼ビ書生ト言ヘハ貧寒ノ士タルヲ免レス。会マ富豪ノ書生アルモ教育ヲ受ケタルカ為メニ家産ヲ蕩尽スルモノ多ク、之ヲ要スルニ学者ハ必ス貧シク、学者トナレバ貧士トナラサルヲ得サルノ情態アリテ、学問ト富有トハ幾ント無縁ノモノトスルニ至レリ。試ミニ実事ニ就テ之ヲ求メシニ從來大家名家ノ名ヲ得タル学者ハ皆寒貧書生ヨリ出タルヲ見テ知ル可シ。然レトモ近時ニ至リ学風自ラ一変シテ教育ノ道大ニ改進シ一般ニ教育ニ就クノ子弟多々ナルニ至リテ、而シテ教育ハ人生必要ノ事ナルハ人ノ父兄タルモノノ了知スル所ナルベシトモ雖モ、充分ニ子弟ヲ教ルノ資本アル父兄ニシテ猶ホ教育ニ吝ナルモノアルハ今ニ在リテ猶ホ然リ父兄タルノ道ヲ尽セリト言フ可ケンヤ。

韓文公歐陽詹ガ哀詞ヲ作リテ云。詹閩人也父母老矣。捨朝夕之養ニ以来ニ京師。其心將下以有得ニ於是ニ而帰為

父母榮也。雖ニ其父母之心ニ亦然。詹在側雖ニ無ニ離憂ニ其志不レ樂也。詹在ニ京師雖ニ有ニ難憂ニ其志樂也。以テ親子共ニ学事ノ為メニ其愛情ヲ制スルノ切ナルヲ觀ルベシ。敢テ世ノ父母ニ問フ。財ト子ト孰レカ貴キ。財ニ吝ナルハ子ヲ教ルノ法ナル乎。子ヲ教ユルニ吝ナルハ財ヲ蓄フルノ道ナル乎。

(6) 演説会広告十五件〔告知〕欄

三田演説会。来ル^(三月)廿二日午後二時より開場。三田の□外国新聞論・福沢論吉。学ノ字ノ解・猪飼麻次郎。仙郷夢想自由貿易・古渡資秀。浮世を渡る人の道・加藤政之助。三田演説会幹事。加藤政之助。(三月二十二日)

三田演説会。来ル十二日午後一時ヨリ開場。学者ノ融通・河野捨蔵。統計ノ説・加藤政之助。発達論・工藤精一(本塾社員亞国留学七年ニシテ化学卒業。本年三月帰朝。)宗教ノ利害・福沢論吉。三田演説^(三月)幹事。加藤政之助。(四月十一日)

三田演説会。来ル二十六日午後二時開場。国会沿革論・古渡資秀。代議人ノ責任・吉良亨。振武論・加藤政之助。演題未定・工藤精一。蒸気電信印刷之説・福沢論吉。演説会幹事。加藤政之助。(四月二十五日)

三田演説会。来る十日午後二時開場。切棄免許論・福沢諭吉。教育論・工藤精一。朝鮮事件之談判・加藤政之助。国会沿革論・古渡資秀。三田演説会幹事。加藤政之助。(五月九日)

三田演説会。来る二十四日午後二時開場。性理論・河野捨三。男女同権ト同等ノ弁・永田一二。口不可箱・加藤政之助。演題未定・工藤精一。外戦不可急・福沢諭吉。幹事。加藤政之助。(五月二十三日)

三田演説会。来る十四日午後二時ヨリ開場。日本ノ沿革・江口高邦。人間ノ義務・永田一二。安心楽命ノ説・尾崎行雄。新聞雜誌ノ説・加藤政之助。民権論・福沢諭吉。幹事。加藤政之助。(六月十三日)

三田演説会。来る二十八日午後二時開場。賞罰論・中村英吉。兵勢論・尾崎行雄。日本将来ノ目的・加藤政之助。民権論前回ノ続・福沢諭吉。幹事。加藤政之助。(六月二十八日)

三田演説会。来る十二日午後二時ヨリ開場。但し暑中に付今会限り休。力ノ説・中村英吉。論題未定・江口高邦。報国心ノ分析・永田一二。国会論・加藤政之助。民情論・福沢諭吉。幹事。加藤政之助。(七月十一日)

三田演説会。来る十三日午後二時開場。朋党論・伊

東茂右衛門。学問ノ解・中村英吉。慾ノ世ノ中・永田一二。人間処世之要訣・尾崎行雄。社会雅俗ノ關係・鎌田栄吉。教育論・小幡篤次郎。門閥論・福沢諭吉。幹事。中村英吉。(九月十二日)

三田演説会。来る二十七日午後二時開場。県会ノ功能・中村英吉。論題未定・長岡謙次郎。社会党ノ説・鎌田栄吉。交際ノ利弊・永田一二。富家ノ子弟教育ノ事・福沢諭吉。幹事。中村英吉。(九月二十六日)

三田演説会。来る十一日午後二時ヨリ。地租改正論・伊東茂右衛門。独立主義・中村英吉。論題未定・永田一二。干涉ノ得失・兩山達也。地方士族未来記・草間時福。結社論・浜野定四郎。門閥論前回ノ続キ・福沢諭吉。(十月十日)

三田演説会。来る二十五日午後二時ヨリ。遺伝論・松山誠二。外交論・永田一二。社会動静論・鎌田栄吉。論題未定・浜野定四郎。往来通信論・草間時福。交通論・福沢諭吉。(十月二十四日)

三田演説会。来る八日午後二時ヨリ。町村会ノ得失・岡崎亀雄。宗教論・中村英吉。貧富懸隔論・永田一二。往来通信論続キ・草間時福。論題未定・浜野定四郎。物

理学ノ要・福沢諭吉。(十一月七日)

三田演説会。来ル廿二日午後三時ヨリ。人体論・伊東
茂右衛門。苞苴論・永田一二。封建史ノ説・草間時福。
東西人物論・浜野定四郎。平民教育之功能・福沢諭吉。

(十一月二十一日)

三田演説会。来ル十三日午後二時ヨリ。将来ノ压制・
中村英吉。兵役論・雨山達也。学門ノ方向・四屋純三郎。
論題未定・森下岩楠。職業之説・福沢諭吉。本会ヲ限り
暫時休会致候事。幹事。中村英吉。(十一月十二日)

明治十三年

(1) 演説会広告十九件(「告知」欄)

三田演説会。来ル十日午後二時より。但し当日ハ例年
之通り試文の褒賞を授与するに付、正午十二時より開館
致候事。法ハ公明正大ヲ要ス、幼年・柴田良弼。日本将
来ノ目的、中年・三好義直。愛国論、永田一二。論題未
定、草間時福。支那之説、福沢諭吉。(一月九日)

三田演説会。来ル廿四日午後二時ヨリ。統計学ノ急
要・村田百合助。論題未定・長岡謙次郎。移住之説・中
村英吉。無神經之説・永田一二。變動以テ治安ヲ維持ス・
福沢諭吉。幹事。中村英吉。(二月二十三日)

三田演説会。来ル十四日午後二時ヨリ。富ノ勢力・佐

伯剛平。議院ハ二局ヲ要ス・村田百合助。「ジューエル」
ヲ論ス・波多野承五郎。貧富之説・鎌田栄吉。論題未定・
福沢諭吉。(二月十三日)

三田演説会。来ル二十八日午後一時ヨリ。紙幣論・長
岡謙次郎。小国維持之要法・中村英吉。論題未定・門野
幾之進。富国三法・佐田介石。漢学ノ説・福沢諭吉。幹
事。中村英吉。(二月二十七日)

三田演説会。来ル十三日午後一時より。風俗改良ノ変
則法・渡辺脩。政談ノ自由・雨山達也。論題未定・波多
野承五郎。銀行ノ危難・森下岩楠。論題未定・福沢諭吉。
幹事。中村英吉。(三月十三日)

三田演説会。来ル廿七日午後一時ヨリ。殖民論・坂田
実。論題未定・田中精一。日本国憲論・波多野承五郎。
貧民自立之説・福沢諭吉。(三月二十六日)
都合有之本日の老回ハ休会致候事。四月十日。三田演
説会幹事。(四月十日)

差支有之来ル廿四日ハ休会致候間此段広告す。四月廿
二日。三田二丁目一番地。三田演説会幹事。(四月二十三
日)

三田演説会。定日ハ今土曜日に候処都合有之此回限り
翌日曜即ち九日午後二時よりとす。読書ノ説・渡辺脩。

移住之説・中村英吉。同行伊勢参宮ハ全ク無益歟・長岡謙次郎。貧民自立之説・前会ノ続キ、福沢諭吉。三田演説会幹事。(五月八日)

三田演説会。来ル廿六日午後二時ヨリ。但シ政談ニアラス。進取之説・渡辺脩。世人ハ農ヲ誤認セザル乎・後藤直彦。休息ノ説・中村英吉。機軸論・長岡謙次郎。三不足之説・波多野承五郎。運輸交通ノ説・福沢諭吉・三田演説会幹事。(六月二十五日)

三田演説会。本月十日午後二時ヨリ。後見人ノ任・高橋正信。儘ナラス浮世・小出儀一郎。地方ノ衰弊・渡辺脩。世渡ノ杖・岡崎龜雄。褒美ノ説・林欽亮。論題未定・高木喜一郎。苦楽之説・福沢諭吉。三田二丁目二番地。三田演説会幹事。(七月九日)

傍聴無料。三田演説会。来ル廿四日(土曜日)午後一時半ヨリ。外形之感化・林欽亮。世上ノ穴・渡辺脩。小説論・門野幾之進。耻論・鎌田栄吉。開化之弁・野田精一郎。文明ト道德之關係・松原岩二郎。演説之困難・松岡直忠。品行論・福沢諭吉。翻訳論・小出儀一郎。智力論・枝元長辰。健全論・三好義直。三田二丁目二番地。三田演説会幹事。(七月二十二日)

傍聴無料。三田演舌会。来十一日午後二時ヨリ。無廉

耻ノ説・池内徳太郎^(源太郎カ)。道德論・高橋正信。多数ノ智愚・高島堂治。信任ノ説・渡辺脩。教育論・井上寛一。新陳代謝ノ説・野村肇。教育論・渡辺久馬八。借財論・川野^(門カ)。幾之進。運輸通行ノ説・福沢諭吉。三田二丁目二番地。三田。演舌会幹事。(九月十五日)

傍聴無料。三田演舌会。来ル廿五日午後二時ヨリ。英雄ノ説・今村正章。幸福論・小出儀一郎。文章ノ説・竹内正誌。雨乞ノ説・渡辺脩。仏陀ノ説・石原福寿。変遷ノ説・波多野承五郎。弊害論・三好義直。日本ノ女子・高橋正信。風潮ノ奴隸・矢田績。題未定・福沢諭吉。三田二丁目二番地。三田演舌会幹事。(九月二十五日)

傍聴無料。三田演説会。来ル九日午後二時ヨリ。勲章説・矢田績。明治ノ日本・高橋正信。恐怖ノ説・高島小金次。仁愛論・渡辺脩。仲間行事・今村正章。道德論・山崎程者。回教ノ説・坂井次永。慾ノ説・井出徳太郎。新陳代謝・波多野承五郎。題未定・福沢諭吉。三田二丁目二番地。演舌会幹事。(十月八日)

傍聴無料。三田演説会。来ル二十三日午後二時ヨリ。交際論・三好義直。観劇之説・矢田績。保護之説・犬養毅。衣食之説・小出儀一郎。不測之害・高橋正信。遺産論・雨山達也。春ヲ欲ス・池内源太郎。依頼心・今村正

章。輿論之压制・野田精一郎。婚姻論・井上寛一。黄金世界・山田良作。漢学之説・福沢諭吉。三田二丁目一番地。演説会幹事。(十月二十三日)

傍聴無料。三田演説会。来十三日午後二時より。仏陀論・石原福寿。短命ヲ惜・池内源太郎。人望論・渡辺脩。論題未定・鎌田英吉。学問ノ目的・高島小金治。穿鑿ノ精神・矢田績。疑ノ説・山崎程者。生意氣論・小出儀一郎。論題未定・福沢諭吉。(十一月十三日)

傍聴無料。三田演説会。来る二十七日午後二時より。詐偽ノ説・井出徳太郎。正氣論・高島小金治。士族就産論・雨山達也。書生ノ責任・松原岩次郎。都邑論・鎌田栄吉。競争論・東三之助。言語ノ説・盛与三郎。論題未定・福沢諭吉。三田二丁目一番地。演説会幹事。(十一月二十六日)

傍聴無料。三田演説会。来る十一日午後二時より。開明之極・今村正章。理ト実ノ関係・渡辺脩。評判ノ説・矢野可宗。学者之弊・北川礼弼。服制論・盛与三郎。前回演説之続・福沢諭吉。三田二丁目。演説会幹事。(十二月十日)

(2) 政談演説にあらず(「府下雜報」欄)

初期三田演説会資料

三田の演説会を間々政談演説と誤認する人もある由なるが本日(六月二十五日)の告知にもある通り全く性質を異にするものなり。(六月二十五日)

明治十四年

(1) 臨時演説会(「府下雜報」欄)

曾て告知欄内に掲げたる通り明廿日三田演説館に於て臨時演説会を開くハ此頃同館の演説非常の進歩を表し聴衆中には月に二回のみにてハ其間待ち通なりとて臨時の演説を促がす者少なからず。依て其望みに応じての事なれば自後ハ好論題のある毎に定期演説の外屢々臨時演説を開く事に決せし由。右演説にハ客歳以来相模の国会願望者の聘に依り、其全国を巡講し其人民をして国会の何物たるを知らしめし高木喜一郎氏も出場さるゝ由。(二月十九日)

(2) 義塾の教育と演説(「府下雜報」欄)

学問ハ読者のみに在らず。人の働きハ精神のみに在らず。書を読て兼て世事に通じ精神を鍊つて兼て身体を健全にし、心身共に剛く雅俗両ながら全ふして始めて有為の人物なりトハ人の常に言ふ所にして教育の法ハ斯くある

りたき事なれども、動もすれば其中庸を失ふもの多し。

東京三田の慶応義塾ハ官私諸学校中最も履歴の久しきものにして、生徒の数常に三百名に下らず。其教育法の整頓ハ無論、就中右の二要事に注意して生徒読書の余暇にハ必ず運動を勧めて怠ることなし。又三五年前より邸中に柔術、剣術の道場を設け時間を定めて劇運動をなさしむ。該塾賄ひ方の話に普請等の事故に際して道場を閉すことあれば、其閉場の間ハ生徒飯米の量を減ずること凡そ一割半にして、之を開けば忽ち前の多量に復すといふ。其運動の尋常ならずして健康に実益ある弁を俟ずして明かなり。故を以て華族其他富豪の子弟或ハ奉養の渥きに過ぎて、為めに却て虚弱なる者ハ入塾の後数月を出でずして次第に筋骨の発達を覚え、随って精神も自から活潑を致す者尠ならずといふ。又該塾中の生徒ハ大人、中年、童子、幼稚の四部に分って各塾舎を別にし、又其中に幾個の組合を結んで学芸の演説討論会を設け、本課の余暇に之を勉強せしむ。学生をして弁論の法に慣れしめ且つ沈深の理論に兼て活潑の働きを奨励するの趣旨ならん。来四月二日は本館の演説堂に於て童子の演説会を開くといふ。其次第ハ本日広告欄内に就て見よ。社会進歩の原素ハ蓋し此辺に在て存するなるべし。(三月三十一

日)

(3) 幼童演説会広告三件

四月二日午後一時。三田慶応義塾幼童演説。傍聴無料。本塾にハ多年來読書本課の傍に学芸の演説討論会を開き童子に至るまでも之を勉めざる者なし。依て来る四月二日にハ特に童子をして其得意の技倆を聴衆の前に試しめんとす。亦以て少年奨励の一助たる可し。願くハ在塾生徒の父母兄弟ハ無論世間苟も教育に志あらん人ハ來聴を煩ハして衆童に喝采を得せしめよ。本日演説童子の姓名及び論題左の如し。父母ノ職務・松平忠行。光陰論・早矢仕四郎。鏡ノ説・山田守雄。利ノ説・林弥三郎。撰友論・門野重九郎。影ノ説・杉山喬。宝ノ説・加勢春吉。不快論・柴田良弼。栄誉論・福沢捨次郎。両性論・覚前政蔵。以下大人数名。(三月三十一日)

傍聴無料。三田慶応義塾幼童演説会。来ル七月二日午後二時ヨリ第二回幼童演説ヲ開クニ付。在塾生徒ノ父母兄弟ハ無論苟モ教育ニ志アラン人ハ來聴ヲ煩ハシテ衆童ニ喝采ヲ得セシメヨ。本日演説童子ノ姓名及ビ論題左ノ如シ。鼠ノ咄・一柳讓二。勉強ノ説・大坪金之輔。富国論・山田吉造。立志論・菅生俊二郎。忍耐論・古川岩吉。

儉約論・早矢仕四郎。教育論・山田守雄。頼ム可キハ學問・馬場幸之助。雷同之蔽・小島政亨。天災懼ル、ニ足ラス・加勢春吉。競争論・杉山喬。(七月二日)

三田慶応義塾幼童演説会。来ル十五日午後一時ヨリ演説館ニテ。傍聴無料。演説ノ勢力・佐久間山治。忠言逆耳・山田吉造。小事ハ忽ニス可ラス・古川岩吉。孝行ノ説・由利真男。金満家ニ愚人多シ・松平忠行。勉強ノ説・古谷太郎。学校説・興倉直吉。疑惑ノ説・早矢仕四郎。戦端ヲ開クハ害アツテ利ナシ・馬場幸之助。結合論・山田守雄。鉄道論・田嶋浩造。独立論・林弥三郎。輿論ノ勢力・鹿兒木小太郎。時アルトキニ時ヲ得ヨ・小島政亨。名実論・松井雄次。其他大人数名。(十月十七日)

(4) 演説会広告二十件〔告知〕欄)

傍聴無料。三田演説会。来ル八日午後二時より。但し当日ハ例年の通り試文の褒賞を授与するに付正午十二時より開□致候事。泉之説・加勢□吉(童子)^(春)。トレード之利害ヲ論ス・野沢元次郎(中年)。□年ノ祝言・高橋正信。一年之計・小出儀一郎。公利公□之説・渡辺脩。論題未定・林欽亮。論題未定・福沢諭吉。三田二丁目二番地。演説会幹事。(一月八日)

傍聴無料。臨時三田討論演説会。十六日午後第一時より。演説者。平賀敏。矢野可宗。高橋正信。矢田績。門田正経。外に討論者十五名。幹事。(二月十六日)

傍聴無料。三田演説会。来ル二十二日午後一時ヨリ。社会ノ成立・高須峰造。農家ノ為ニ計・井上角五郎。地方人民ノ化導・井上貫一。快樂ノ説・井出徳太郎。教育論・原敬。心理裝飾論・高島小金治。論題未定・高木喜一郎。論題未定・福沢諭吉。三田二丁目二番地。演説会幹事。(二月二十二日)

傍聴無料。三田演説会。今十二日午後一時より。高須峰造。渡辺修。矢田績。岡崎亀雄。波多野承五郎。津田興二。福沢諭吉。三田二丁目二番地。演説会幹事。(二月十二日)

傍聴無料。臨時三田演説会。来ル廿日午後一時ヨリ。岡崎亀雄。津田興二。波多野承五郎。本多孫四郎。林欽亮。高島小金治。矢田績。高木喜一郎。波多野一。三田演説会幹事。(二月十八日)

傍聴無料。三田演説会一百回紀。来廿六日午後一時より。小幡篤次郎。阿部泰蔵。林欽亮。岡崎亀雄。津田興二。高島小金治。福沢諭吉。三田二丁目二番地。演説会幹事。(二月二十四日)

傍聴無料。三田演説会。来十二日午後一時より。井出徳太郎。渡辺脩。竹村良貞。高須峰造。矢田績。小出儀一郎。宮内祐輔。福沢諭吉。三田二丁目。演説会幹事。

(三月十一日)

傍聴無料。三田演説会。来廿六日午後一時より。論題未定・高須峰造。注意論・山崎程者。人口論・村田豊。処世之法・平賀敏。華士族論・北川礼弼。富ノ勢力・渡辺修。日本ノ風土・矢田績。論題未定・福沢諭吉。三田二丁目二番地。演説会幹事。(三月二十五日)

三田演説会。来ル九日午後一時ヨリ。論題未定・高須峰造。地籍論・村田豊。決死論・井出徳太郎。文章論・井上角五郎。宗教□勢力・小林楠之丞。社会ノ無智・盛与三郎。信用論・波多野一。論題未定・福沢諭吉。(四月八日)

傍聴無料。三田演説会。来十四日午後第一時より。演説者。津田興二。高橋正信。平賀敏。北川礼弼。井上角五郎。岡崎亀雄。雨山達也。福沢諭吉。(五月十三日)

傍聴無料。三田演説会。来ル廿八日午後一時より。出席員。平賀敏。井上角五郎。北川礼弼。山田良作。小林楠之丞。井出徳太郎。高須峰造。福沢諭吉。(五月二十七日)

聴講無料。三田演説会。来ル十一日午後第一時ヨリ。演説者。鎌田栄吉。平井忠雄。東三之助。野田精一郎。雨山達也。小浦準三郎。福沢諭吉。三田演説会幹事。

(六月十日)

聴講無料。三田演説会。来ル二十五日午後一時ヨリ。演説者。鎌田栄吉。北川礼弼。松原岩次郎。井上角五郎。山田良作。雨山達也。小浦準三郎。福沢諭吉。三田演説会幹事。(六月二十四日)

聴講無料。三田演説会。来ル九日午後第一時より。演説者。村田豊。山田良作。平井忠雄。渡辺修。雨山達也。宮内祐輔。竹村良貞。鎌田栄吉。福沢諭吉。(七月八日)

三田演説会。来ル廿三日午後二時ヨリ。演説者。北川礼弼。森常樹。東三之介。井上角五郎。平井忠雄。高須峰造。雨山達也。福沢諭吉。三田演説会幹事。(七月二十二日)

傍聴無料。三田演説会。来ル十日午後二時ヨリ。渡辺修。平賀敏。和田基太郎。東三之介。北川礼弼。山田良作。門野幾之進。福沢諭吉。三田演説会幹事。(九月九日)

傍聴無料。三田演説会。来ル廿四日午後一時ヨリ。村田豊。井上角五郎。平井忠雄。東三之介。渡辺修。雨山

達也。福沢諭吉。三田演説会幹事。(九月二十二日)

傍聴無料。三田演説会。来ル八日午後一時ヨリ。小林
菅智。東三之介。平賀敏。野田精一郎。山田良作。森田
勝之助。矢野可宗。岩永勝克。^(マヤ)福沢諭吉。三田演説会幹
事。(十月七日)

傍聴無料。三田演説会。来ル廿二日午後一時開館。井
上角五郎。北川礼弼。野田精一郎。坂田実。松原岩次郎。
雨山達也。井出徳太郎。岩永勝巳。福沢諭吉。三田演説
会幹事。(十月二十一日)

傍聴無料。三田演説会。来ル十日午後一時ヨリ。東三
之介。森常樹。小林福之介。松原岩次郎。大岡直頭。山
田良作。井上久米一郎。福沢諭吉。三田演説会幹事。(十
二月十日)

明治十五年

(1) 演説会広告九件〔告知欄〕

三田演説会。来ル二十八日午後一時ヨリ。門野幾之進。
高島小金治。山田要三。^(蔵)矢田績。岩永勝巳。福沢諭吉。

(一月二十七日)

三田演説会。来ル十一日午後一時ヨリ開会。浜野定四
郎。門野幾之進。高嶋鈔治。山田要蔵。森下岩楠。福沢

諭吉。(二月九日)

傍聴無料。三田演説会。来ル廿五日午後一時ヨリ。山
崎新太郎。岩永勝巳。江口高邦。坂田実。雨山達也。波
多野承五郎。須田辰次郎。福沢諭吉。(二月二十五日)

三田演説会。来ル十一日午後第一時ヨリ。浜野定四郎。
矢田績。雨山達也。渡辺修。久代孝次郎。福沢諭吉。(三
月十日)

三田演説会。来ル二十五日午後第二時ヨリ。江口高邦。
山田要蔵。本多孫四郎。高島小金治。高橋正信。門野幾
之進。福沢諭吉。(三月二十五日)

三田演説会。来ル八日午後二時ヨリ。坂田実。渡辺修。
浜野定四郎。門野幾之進。山本長道。福沢諭吉。(四月八
日)

三田演説会。来ル十三日午後第二時ヨリ。門野幾之進。矢
田績。高島小金治。福沢諭吉。(五月十二日)

三田演説会。来ル廿七日午後二時ヨリ。山田要造。^(蔵)坂
田実。門野幾之進。高嶋小金治。福沢諭吉。(五月二十六
日)

三田演説会。来ル十日午後二時ヨリ。高島小金治。雨
山達也。北川礼弼。門野幾之進。福沢諭吉。(六月八日)
当演説会之儀例ニヨリ暑中休会候事。三田演説会。(七

月八日。当年の演説会告知記事はこれが最後となっている。

付記

本資料紹介は慶応義塾学事振興資金による共同研究「日本の近代化と福沢および福沢門下生の活動に関する基礎的研究」の研究成果の一部をなすものである。